

公開講座ダイジェスト2021

跡見学園女子大学公開講座の記録



ATOMI
UNIVERSITY

公開講座ダイジェスト 2021 跡見学園女子大学公開講座の記録

刊行にあたって

跡見学園女子大学は4年前に心理学部を創設し、4学部2大学院研究科からなる中規模女子大学になりました。これに伴い、多様な分野をカバーする教員の存在が、今年度の公開講座でも新しい企画を可能にしたと思われま

す。大学はアカデミックな知を地域社会に還元し、その交流を通じて自らの教育や研究の内容をより豊かなものにしていかねばなりません。新座キャンパスでは、今年度前半に文学部現代文化表現学科の三輪健太郎講師の講座担当で「手塚治虫とマンガ・アニメ文化」という教養コースが開設されました。本学のみならず、他大学の専門家の協力も得て、「手塚治虫と戦後日本」「少女マンガと手塚治虫」「アニメ史における手塚治虫」と言ったユニークな講座が提供されました。また後半は、観光コミュニティ学部土居洋平准教授の講座担当で「都市のコミュニティを考える」という教養コースが開設されました。本学教員によって「<居場所づくり>から都市コミュニティについて考える」「徒歩と自転車で暮らせる都市コミュニティ」「韓国における都市コミュニティと市民活動」といった都市の新しい生活空間と移動手段の提案、そして市民運動のあり方がオランダや韓国のケースを参考に提案されました。

文京キャンパスでは、今年度前半に文学部コミュニケーション文化学科中村聡准教授の講座担当で、本学教員によって「ことばの地域差の今」「英語学習の『俗説』を検証する」「カタカナ英語改革論」が開催されました。また後半は、マネジメント学部赤松瑞枝准教授の講座担当で、企業の方の協力も得て「事例にみる要介護者の自立支援と施設のあり方」「家族の変化と介護事情」「自立支援のこれまでとこれから～ホスピタリティ導入の必要性～」といった高度高齢社会に突入した現代日本の家族と地域にフォーカスを当てたテーマが設定され、受講者からも好評でした。

令和2年度は、コロナ感染の拡大によってすべての公開講座の中止を余儀なくされました。令和3年度はコロナ対応を十分に行い、新座、文京キャンパス共に従来と同様に対面にて行うことが出来ました。今後はオンラインと対面を組み合わせ、受講者の多様な要請に対応した公開講座のあり方も模索される時期になったと思っています。他方で、次年度は更に魅力的なテーマを模索し、公開講座の一層の進化を図るべく努力する所存です。

令和4年3月

跡見学園女子大学

学長 笠原清志

CONTENTS

刊行にあたって	跡見学園女子大学 学長 笠原 清志	1
春期教養コース（新座キャンパス）	手塚治虫とマンガ・アニメ文化	3
1. 手塚治虫と戦後日本	本学文学部現代文化表現学科講師 三輪 健太郎	
2. 少女マンガと手塚治虫	相模女子大学学芸学部メディア情報学科教授 岩下 朋世	
3. アニメ史における手塚治虫	本学文学部現代文化表現学科准教授 渡邊 大輔	
春期教養コース（文京キャンパス）	身近なことばの常識を覆す	6
1. ことばの地域差の今	本学文学部コミュニケーション文化学科准教授 中西 太郎	
2. 英語学習の「俗説」を検証する	本学文学部コミュニケーション文化学科講師 穂苅 友洋	
3. カタカナ英語改革論	本学文学部コミュニケーション文化学科准教授 中村 聡	
秋期教養コース（新座キャンパス）	都市のコミュニティを考える	9
1. <居場所づくり>から都市コミュニティについて考える	本学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科准教授 土居 洋平	
2. 徒歩と自転車で暮らせる都市コミュニティ	本学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科教授 坪原 紳二	
3. 韓国における都市コミュニティと市民活動	本学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科講師 松井 理恵	
秋期教養コース（文京キャンパス）	これからの高齢者介護と住環境	12
1. 事例にみる要介護者の自立支援と施設のあり方	株式会社真昇 介護事業部 次長 打田 由裕	
2. 家族の変化と介護事情	本学兼任教員 林 葉子	
3. 自立支援のこれまでとこれから～ホスピタリティ導入の必要性～	本学マネジメント学部生活環境マネジメント学科准教授 赤松 瑞枝	
受講生からのレポート		15
資料		19

公開講座春期教養コース（新座キャンパス）
手塚治虫とマンガ・アニメ文化
2021年6月12日～6月26日（毎週土曜日）〈全3回〉
〈講座責任講師〉 本学文学部現代文化表現学科 三輪 健太郎

この講座で扱った手塚治虫は、戦後日本の大衆文化において大きな役割を果たしたマンガ家であり、またアニメーション作家である。本講座では、現代文化表現学科においてマンガ論とアニメーション論をそれぞれ担当する教員二名と、手塚治虫研究の専門家である外部講師一名とによって、この作家の仕事とその意義を多角的に振り返ることを目指した。

第1回（6月12日）は、学科でもマンガ論を講義する三輪が担当し、手塚治虫の生涯と、マンガ史におけるその位置づけとを概説しつつ、彼を戦後日本史という大きな枠組みの中で再考するためのいくつかの観点を示した。それを通して、マンガ史から現代日本史について再考してみることの学問的な面白さを伝えようと試みた。

第2回（6月19日）は、外部講師として招いた相模女子大学の岩下朋世教授により、特に「少女マンガ」と手塚治虫という論点をめぐっての講義が展開された。著書『少女マンガの表現機構—ひらかれたマンガ表現史と「手塚治虫」』の内容をもとに、手塚の作品群の中で従来見過ごされやすかった少女マンガを取り上げ、検討することの重要性が講義された。また、作品の初出時とその後との異同を細かく分析するなど、マンガを学術的に研究するための方法論の一例が実践的に示された。

第3回（6月26日）は、学科でアニメーション論を講義する渡邊大輔准教授が担当し、アニメ史における手塚治虫が論じられた。手塚は、出版物としてのマンガのみならず、アニメーションの分野にも決定的な影響を残しているが、本格的に論じられる機会は少なく、あるいは否定的な評価を下されることさえも少なくない。講義では、実際のアニメ作品の映像も紹介しつつ、アニメ作家

としての手塚治虫を語るためのアプローチの模索が論じられた。

なお受講者からは、身近な大衆文化が題材ということもあり、「なつかしく感じた」という声や、逆に「今まではあまり関心のない分野だったが奥の深さを知ることができた」などの感想が寄せられた。

〈第1回 6月12日〉

手塚治虫と戦後日本

本学文学部現代文化表現学科講師

三輪 健太郎

手塚治虫（1928-1989）は、戦後日本のマンガ・アニメ文化に多大な功績を残したことで知られ、現在では伝記が出版されたり、学校教科書に名前が掲載されていたりと、すでに歴史上の人物と化している。彼が日本マンガにもたらしたと評される事績は、たとえば「映画的手法」の導入、感情表現の多彩化、悲劇的な物語の開拓、長期連載による大河的物語の構築、モダンでバタ臭い感性の移入など、枚挙にいとまがない。こうして手塚治虫は、戦後マンガを一から築き上げた文字通りの「マンガの神様」とみなされている。

一方で、1990年代以降のマンガ批評や、2000年代以降に活発化した学術的な場でのマンガ研究においては、そうした神格化された手塚像を相対化し、より客観的に検証する試みがなされてもいる。たとえば手塚マンガの土台になったのは、モボ・モガ世代の富裕な両親のもとで過ごした少年時代に、戦前の日本マンガやアメリカのアニメーション、あるいは外国映画や宝塚歌劇などを浴びるように鑑賞することで育んだモダンな感性だった。その意味で彼は決して一から全てを創り上げた「神様」などではなく、20世紀の大衆文化史

の布置のなかに存在した個人であった。

また、アメリカ文化が一挙に浸透した占領期にデビューして人気マンガ家となっていった手塚の作品は、「ヒューマニズム」や「科学」などの戦後の理念を体現したものと理解され、復興から高度成長期へといたる戦後日本の繁栄そのものの象徴のようにもみなされてきた。しかし手塚は、かつてアメリカが敵国へと変貌した戦時下に思春期を送った少年であり、そのことの葛藤と屈折が彼の作品からは否応なく看取される。また、手塚の長きにわたるキャリアの中のいくつかの転機に目を向ければ、戦後日本史のもう一つの面（科学的合理主義ならぬ精神主義）や、メディア環境の激変の中で捨象されてしまった可能性なども見えてくる。手塚治虫について考えることは、このように日本現代史そのものの再考を促すのである。

〈第2回 6月19日〉

少女マンガと手塚治虫

相模女子大学学芸学部メディア情報学科教授

岩下 朋世

手塚治虫は、児童マンガ第一人者としていた1950年代の中頃から後半にかけて、少女雑誌で数多くのマンガを発表している。しかし、その多くは言及される機会が少ない。

一方で、1953～56年にかけて講談社『少女クラブ』で連載され、その後も続編やリメイクが描かれた「リボンの騎士」は、少女マンガにおける「ストーリーマンガ」の最初の作品、あるいは性別越境のモチーフを導入した最初の作品として少女マンガ史上の重要作として評価され、論じられることも多い。

講師は著書『少女マンガの表現機構』（2013）において、こうした手塚の少女マンガをめぐる状況を踏まえ、従来は論じられてこなかった「リボンの騎士」以外の手塚の少女マンガ作品について検討した。本講座は同著の内容に基づいたものとなる。

講座では、まず性別越境的なモチーフをあつ

かった先行する少女マンガ作品を紹介しつつ、少女マンガ史上における「リボンの騎士」評価の再検討を行った。その他の手塚少女マンガとして「ナスビ女王」「エンゼルの丘」を取り上げ、手塚の少女マンガ作品では、キャラクターのアイデンティティの探求のために、瓜二つの人物の入れ替わりや変装といったモチーフが多用されていることも示した。「リボンの騎士」における性別越境のモチーフも、アイデンティティの探求と結びついている点で、これらのモチーフと同系列にあるものとして捉えられる。

また「エンゼルの丘」に関しては、単行本と雑誌初出時の異同についても紹介し、改稿によって初出時でのテーマが現在流通しているバージョンでは見失われていることを示した。こうした改稿は少女雑誌という媒体に合わせた表現や内容を排するために行われたものと見られる。

同様の改稿は『なかよし』連載のリメイク版「リボンの騎士」にも見られる。こうした改稿の背景を考えた場合、1950～60年代にかけて、今日とは異なる方向性での「少女マンガ」様式が模索されていた可能性が見えてくる。講座の結びではその点について示唆した。

〈第3回 6月26日〉

アニメ史における手塚治虫

本学文学部現代文化表現学科准教授

渡邊 大輔

公開講座春期教養コース「手塚治虫とマンガ・アニメ文化」第3回（最終回）は、「アニメ史における手塚治虫」と題して講座を実施した。話の内容を前半と後半に分け、前半は、（マンガ家ではない）「アニメーション作家」としての側面から手塚治虫の経歴と、主だった業績を4点挙げて概観した。すなわち、（1）『鉄腕アトム』（1963-1966）の制作による国産初の30分テレビアニメシリーズの開始と全米放送による現代日本の「アニメ文化」の開拓、（2）「アニメラマ3部作」（1969-1973）による「成人向けアニメーション映画」の開拓と

いう知られざる試み、(3) アート志向・個人制作の「実験アニメーション」の分野での国際的活躍、

(4)「虫プロダクション」の代表や演出家として、日本のアニメ界を担う人材を数多く育成したこと、を順を追って、また『鉄腕アトム』、『ある街角の物語』(1962)など適宜具体的な映像作品の上映も織り交ぜながら説明した。

こうして、手塚治虫のアニメーション作家としての顕著な業績を確認したところで、後半では、今日のアニメーション研究の言説も踏まえながら、にもかかわらず、「手塚アニメ」や手塚のアニメ事業が現在に至るまでほとんど語られてきていないという現状を紹介し、その経緯を解説した。この「手塚アニメの語りにくさ」をなるべくわかりやすく実感してもらおうと、講座では手塚アニメを「ジャンル別」、「クレジット(担当)別」、「手塚マンガとの比較」などに分けて幾つかの表を独自に作成した。その結果、「ほとんどの作品が手塚はアイデアやシノプシスの提供といった途中の段階まで、あるいはほとんど関与していない。また、そもそもどこまで手塚が実際に関わって作られたのかが見えない。それゆえ「アニメ作家」としての手塚の「作家性」(個性)が作品からわかりにくい(評価しにくい)点などが明らかになった。

そして最後に、宮崎駿による有名な手塚治虫批判を紹介し、手塚が日本のアニメ界に導入した「リミテッド・アニメーション」技法の功罪を解説した。アニメーション作家・手塚治虫を「あまりにもよく知られていて、同時にあまりにもまだ知られていない作家」と総括し、講座を終了した。

公開講座春期教養コース（文京キャンパス）
身近なことばの常識を覆す
2021年7月3日～7月17日（毎週土曜日）〈全3回〉
〈講座責任講師〉 本学文学部コミュニケーション文化学科 中村 聡

本学科の専任教員である中西、穂苺、中村の3人が、7月の土曜日午前に90分間の3回の講義を行った。実は、この講座は2020年7月の土曜日午後に予定されていたものだったが、コロナ禍のためいったん中止となり、2021年に入って復活したものだ。2020年当時の予定では、担当講師は中西、中村、他の専任教員であったが、その教員は土曜日午前に授業を持っているため、今回の講座では、穂苺が務めることになった。3人の専門は言語学で、中西は日本語、穂苺と中村は英語が研究対象言語である。言語学系教員のみで講座を持てる機会はそうそうめぐってくるものではないので、3人で知恵を出し合い、統一テーマを「身近なことばの常識を覆す」とインパクトのあるものに決めた。方言学を特に専門とする中西は、「ことばの地域差の今」を題目として初回講義を、日本人の第二言語としての英語習得を長年研究している穂苺は、「英語学習の『俗説』」を検証する」を題目として第2回講義を、本学において英語音声教育を実践してきた中村は、「カタカナ英語改革論」という題目で第3回講義を担当した。

コロナ禍が続く中、しかも午前中に、聴いてくださる方が集まるのだろうか、3人とも不安でしかたがなかったが、初回講義前に、50名の定員を超える応募があり抽選を行ったと知らされたときに、この心配は大方解消した。のちに受講者アンケート結果を読んで、土曜日の午前中に公開講座を開くことをほとんどの受講者が歓迎して下さっていることを知った（例年の公開講座は午後が開いていた）。

講義中および講義後に受講の方々からは自発的な質問を沢山いただき、教員として至福の時間をいただいた。「講義に参加して講義内容への興味や関心が深まった」とアンケートで答えてくださる方が、3回の講義すべてで9割を超えていること

から、各講師が長い時間をかけて講義準備をしてきた甲斐があったと思う。

〈第1回 7月3日〉

ことばの地域差の今

本学文学部コミュニケーション文化学科准教授

中西 太郎

本講座では、現在でも身近にあることばの地域差のあり方について、以下のような内容で講義を行った。

0. ことばの地域差の現状

1. 地域間コミュニケーション・ギャップ
2. これまでの方言学の蓄積から
3. 言語行動に関するアンケート
4. 発展的に明らかにしたいこと
5. まとめ

0. では、共通語化に伴って、いわゆる形式のバリエーションとしての「方言」が少なくなっている現状について解説した。そして、1. では、他地域に行ったとき感じた「あいさつの少なさ」などの事例をもとに、それでもなお起きている地域間のコミュニケーション・ギャップの問題を取り上げた。さらに2. では、形式のバリエーションの解明が先行し、近年になって、あいさつ自体の有無のような「言語行動」の地域差の解明の段階に展開してきたことを説明した。そして、3. では2014年に行った「言語行動」の地域差のアンケート結果をもとに、西日本（／近畿）と東日本（／関東）で見られる具体的な言語行動の地域差についての解説を行った。具体的には、（1）「出てきた料理をほめるとき、ほめる感想に加えて、「肉が柔らかいね。」「ソースの味が絶妙だね。」など、優れている点も具体的にあげて感想を言う。」といった回答傾向が西日本で顕著なのに対し、東日本で

は「出てきた料理をほめるとき、ほめる感想だけを言う。」といった回答傾向が顕著だといった違いなど、14項目の地域差を紹介した。そして、4.では、これらの言語行動の地域差の背景には、発言性、定型性、配慮性などの軸で捉えられる、歴史的背景や社会的構造に根差した「ことばの運用のありかた」に関する巨視的な地域差があることを説いた。最後に、6.でこれらを解明する意義として、以下の2点があるということを示した。

(1) コミュニケーション・ギャップの一因となる地域差についての記述を蓄積すること。

(2) コミュニケーション・ギャップを引き起こす地域差について啓蒙すること。

受講者からは、新たな地域差の視点に気づくことができたという意見が多く寄せられた。

〈第2回 7月10日〉

英語学習の「俗説」を検証する

本学文学部コミュニケーション文化学科講師
穂苅 友洋

英語学習はだれもが成功体験や失敗談をもつことから、多くの「俗説」(白畑ほか, 2004)や「神話」(Brown & Larson-Hall, 2012)が生まれやすい。本講義は、第二言語習得研究が明らかにしてきたことを紹介しながら、英語学習に対する私たちの認識が科学的にどの程度正しいのかを検証し、よりよい英語学習を考えるきっかけを作ることがテーマであった。

まず、「たくさん英語を勉強してきたのに英語が使えないのは教え方が悪いからだ」という俗説を検証した。実際に私たちが英語を学習してきた時間を概算すると、その時間は私たちの感覚を大幅に下回るもので、「英語をたくさん勉強してきた」という前提自体が正しいとは言えないことを説明した。

次に、「英語学習は可能な限り早く始めるべき」という俗説を検証した。この俗説には、習得の「速度(効率)」と「最終到達点」という異なる論点が含まれており、前者と後者で異なる見解が示され

ている。前者については、年少の子どもが年長の子どもや大人に比べて習得が速いということではなく、むしろ逆の結果を示す研究も多いことを紹介した。後者については、学習開始が早いほど母語話者と同程度の運用力を獲得できる可能性は高くなるが、学習開始が遅かったとしても、母語話者と同程度の運用力が獲得できる側面もあることを論じた。

最後に、「英語を使う際の誤りは勉強不足が原因だ」とする俗説について、講師自身の研究も含めて検証を行った。誤りは勉強不足が原因の場合もあるが、実際には、英語を習得する過程でだれもが避けて通れない発達上の誤りや、母語の影響を受けて無意識に生じる誤りもあり、これらの中には、一定の熟達度に達するまでは繰り返し練習しても克服が難しいものもあることを説明した。

これらの検証を踏まえ、英語を身に付けるためには、「何をするために英語を身に付けるのか」という適切な目標設定のもと、誤りとうまくつきあいつつ、時間をかけて継続的に英語を学習・使用することが大切だと結論付けた。

〈第3回 7月17日〉

カタカナ英語改革論

本学文学部コミュニケーション文化学科准教授
中村 聡

日本語の音韻構造にしたがって表わされたカタカナ英語は、原音との相違の程度が小さいものであれば、そのまま発音しても英語話者に理解されるが、相違の程度が大きければ、英語話者に話し手の意図は伝わらない。カタカナ英語は日本語であって実際の英語として通じることを前提としていないという反論は成り立つが、カタカナ英語が日本人の英語習得の足を引っ張っていることもあるという視点も可能である。たとえば、「アイブロー(眉毛)」「イコール」「イメージ」「エジソン」の原音はそれぞれ /¹aɪbraʊ/, /¹i:kwəl/, /¹ɪmɪdʒ/, /¹edɪsən/だが、/¹aɪbləʊ/, /¹ɪkɔ:l/, /¹ɪmeɪdʒ/, /¹edʒɪsən/ だと思っている本学学生

が少なからずいることが講師自身の調査の結果からわかる。この事実は、カタカナを通して多くの英語に触れているのに、その知識が原音の認識と結びついていないことを示している。カタカナ英語の発音を原音と全く同じにすることはできないが、英語教育的視点から、原音との相違を減らすためのカタカナ表記変更を考える必要があるのではないか。上記のカタカナ英語は「アイブラウ」「イクワル」「イミツヂ」「エディソン」と表記すれば、原音にかなりの程度近づけられる。「イコール」や「イメージ」は日本社会に深く根づいているため、早急に表記を変えることは無理かもしれないが、「アイブロー」を「アイブラウ」に、「エジソン」を「エディソン」に変えることは十分に可能だろうし、実際そのように表記している国語辞典もある。以上が講義の概要である。講義では上記の語以外にも原音とかけ離れた数多くのカタカナ英語を取り上げ、それぞれの表記改定例を示した。

受講の方々からは多くの質問と意見があり、私のような者でも少しは社会の役に立っているのだという感覚を持たせていただいた。また、全員がアンケートに回答くださり、「事例紹介としては興味深かったが、(中略)学術的な研究をされた結果の紹介があると大学の公開講座らしいと感じた」という、今後の研究の参考となる感想もいただき、有難く感じている。

公開講座秋期教養コース（新座キャンパス）
都市のコミュニティを考える
2021年11月20日～12月4日（土曜日）〈全3回〉
〈講座責任講師〉 本学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科 土居 洋平

新座キャンパスで行われた公開講座「秋期教養コース」では、「都市のコミュニティを考える」と題して、観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科教員3名が講話を行った。このテーマは、2019年度の文京キャンパスでの公開講座と同じタイトルである。コミュニティデザイン学科では、学科教員9名が各々の専門領域の視点でコミュニティと関わりを持っている。特に、文京キャンパスや新座キャンパスの立地する都市部のコミュニティとの関わりは強い。今回の講座も、2019年度と同様に学科教員の日常的な研究や教育実践のもと、それぞれの視点から都市コミュニティの現代的課題に迫るものとなった。

第1回は、11月20日（土）に開催され、土居洋平准教授が「〈居場所づくり〉から都市コミュニティを考える」と題して、近年、都市のコミュニティ形成で大きな役割を果たしつつある都市の〈居場所づくり〉活動についての講話を行った。講座初回ということもあり、講義の前半では「コミュニティとは何か」「その現代的な課題は何か」といった講座全体の前提知識についても触れられている。第2回は、11月27日（土）に開催され、坪原紳二教授が「徒歩と自転車で暮らせる都市コミュニティ」と題し、徒歩と自転車で日常生活を完結できるコミュニティについて講話を行った。第3回は、12月4日（土）に開催され、松井理恵講師が「韓国における都市コミュニティと市民活動」と題して、韓国での市民活動をもとに韓国の都市コミュニティのありかたについて講話を行った。

講義後のアンケート結果を確認すると、「この講座を受講して、内容について興味や関心が深まりましたか」という問いに対して、90.7%の受講者が「深まった」と回答している。また、自由回答でも講座内容に対して肯定的な意見が多く、講座の目的は十分に果たせたと考える。

ただし、自由回答ではコロナ禍のなかの開催の割に、教室の大きさに対して参加者が多いのではないかという意見や、座席配置について工夫を求める声も寄せられていた。コロナ禍はもうしばらくは続きそうな状況であるから、来年度以降については、感染対策には今年度以上に配慮を深めた形で実施されることを望みたい。

〈第1回 11月20日〉
〈居場所づくり〉から都市コミュニティについて考える
本学観光コミュニティ学部
コミュニティデザイン学科准教授
土居 洋平

「都市のコミュニティを考える」という連続講座の初回ということもあり、講義の前半では、現代社会におけるコミュニティを巡る状況について概説した。特に、かつての閉鎖というより開放、構造・文化というより実践、再生というより創造という点で、かつての共同体とは異なる形でのつながり、コミュニケーションや対話が重視される形でコミュニティが求められていることなどを解説した。そのうえで、特に都市において、個人が自由だが分断された存在となり経済的価値が強く追及されるようになっていることや、そのなかでつながりが再評価されはじめているなど、価値観の転換が生じていることを紹介しながら、現代の都市コミュニティの意義について解説した。

そのうえで、講義の後半においては、都市コミュニティを新たに創る鍵として〈都市の居場所〉（例：コミュニティカフェ・地域のたまり場・コミュニティスペース等）づくりが各地で進んでいる様子を紹介した。〈都市の居場所〉は、公共施設ではない私的空間を公共につなぐ場であり、つながりをつくるきっかけを提供し、つながる活動が具体的に展開する場でもある。講義では、文京

区を事例に区の「新たな公共プロジェクト」

(2013~2016年)や、区社会福祉協議会の地域福祉コーディネーターの配置などを受けて、区内に〈都市の居場所〉が次々に誕生していく様子を紹介した。また、これとは別に民間企業で地域に開放された〈都市の居場所〉を創る取り組みも進み、こうした〈都市の居場所〉同士がさらに連携をしながらつながりを深めるイベントなども開催され、それによって文京区内に開放的で緩くつながるコミュニティが形成されつつあることを紹介した。最後に、そうした緩くつながる開放的なコミュニティが、都市においてどのような機能を果たしうるのか、また、何故そうした機能を果たすのかについて解説をした。

〈第2回 11月27日〉

徒歩と自転車で暮らせる都市コミュニティ

本学観光コミュニティ学部

コミュニティデザイン学科教授

坪原 紳二

秋季公開講座「都市のコミュニティを考える」の第2回は、現在、パリをはじめとする世界の都市が実現に努めている、「15分都市」の実現方法について説明した。15分都市とは、徒歩もしくは自転車で最大15分移動すれば、日常生活上の必要を満たせる都市のことで、簡単に言えば、徒歩と自転車だけで、快適に暮らせるまちのことである。温室効果ガスを出さないで地球環境にやさしく、また、コロナ禍を機に高まった身近な地域への関心に応えることのできるまちでもある。講座では、この15分都市の実現方法を、中心市街地及び自転車走行空間の二つの観点から、オランダの事例を使って説明した。

中心市街地については、歩行者が快適に過ごせる場となっていることが必要であり、そのためには車を規制することが不可欠である。講座ではオランダの3都市、フローニンゲン、ハーグ、そしてアムステルダムが中心市街地で実施した政策を紹介した。いずれの都市も、一方通行規制、ある

いは車止めによって、中心市街内を車が通り抜けられないようにし、そのことで歩行者が主役の中心市街地を実現していた。

自転車走行空間については、まずは日本の現状を確認し、「車道混在」と言われる、車道左端に矢印を描くだけの整備が主流となりつつあることを指摘した。一方でオランダでは、やはり車道混在なのだが、自転車優先の原則の下、自転車が車道中央を走ってよい道路、「フィーツストラート」が急速に増えつつある。講座ではこのフィーツストラートの断面構成を解説し、一般的に道路幅員の狭い日本でも適用しやすいことを、大学キャンパス近くの道路を対象に改修案を作って示した。

内容が中心市街地や道路のデザインに関することなので、極力写真やビデオを多く使って説明した。ビデオについては、コロナ禍前にオランダで撮影したビデオを多数使い、そこに地図や改修前の写真を挿入することで理解を促した。熱心にメモとる聞き手が多く、また休憩時間や終了後にも多くの方々が質問に来てくださり、海外の話が中心ではあったが関心の高さをうかがうことができた。

〈第3回 12月4日〉

韓国における都市コミュニティと市民活動

本学観光コミュニティ学部

コミュニティデザイン学科講師

松井 理恵

韓国の都市では、血縁組織、地縁組織（郷友会など）、学縁組織（同窓会など）といった任意参加の組織が重要であり、都市コミュニティはあまり注目されてこなかった。そこで、韓国をフィールドとした文化人類学研究的蓄積から韓国のコミュニティの特徴を明らかにしたうえで、都市コミュニティを捉える手がかりを得ることとした。韓国のコミュニティにおいてはしばしば地縁的ユニットと社会的ユニットのズレが指摘されているが、物理的な存在の共有がこの二つのユニットを結びつける可能性をもつことがわかった。したがって、都市における具体的な物理的空間に基づく、言い

換えるならば特定の地域資源を有する地域社会でしかできない市民運動とその活動に焦点を当て、韓国の都市コミュニティを考察した。

韓国東南部の内陸都市である大邱は、ソウル、釜山に次ぐ韓国第三の都市とされている。大邱は韓国のその他の都市とは異なり朝鮮戦争の被害をあまり受けなかったため、古い街並みが残されることとなった。2001年に始まった「大邱の再発見」という市民運動は、都市に残された物理的空間を手がかりに、郷土史を発掘、地域資源を見出そうとするものである。この調査活動の成果は2007年に一冊の本にまとめられ、2011年からは官民協働の都市景観整備事業に発展した。

大邱の旧市街に位置する北城路という地区は、日本による植民地時代に開発された。当時の建物が今も数多く残されている。このような建物を含め、1960年代以前に建てられた近代建築物を対象としてリノベーション事業が実施された。その結果、この市民運動に共感する人びとがコミュニティに流入するようになると同時に、地元の住民がコミュニティを捉えなおすきっかけとなった。まとめるならば、都市における物理的な存在（ここでは近代建築物）が核となり、都市コミュニティが再編されたといえる。韓国の都市コミュニティのおもしろさはこのようなダイナミクスのなかにある。

公開講座秋期教養コース（文京キャンパス）

これからの高齢者介護と住環境

2021年12月11日～12月25日（毎週土曜日）〈全3回〉

〈講座責任講師〉本学マネジメント学部生活環境マネジメント学科 赤松 瑞枝

我が国では団塊世代がすべて75歳以上となる2025年に向けて、介護を必要とする高齢者がさらに増加すると予測される。また別居子による通いながらの介護や働きながらの介護も増えつつあり、社会的サービスの利用ニーズの高まりも予測される。このような社会構造の中で介護を必要とする高齢者の尊厳を保ち、介護に携わる家族の負担も軽減していくために、自立支援の再定義が喫緊の課題となっている。そこで本講座では、高齢者介護の問題を、家族と介護のあり方の歴史の変遷と現状、自立支援の捉え方、特徴的な通所介護事業所の運営手法といった多角的な視点から紹介し、学術的かつ実用的な情報を提供することを目的とした。

本講座受講生の年代は60歳代と70歳代が8割以上を占め、50歳代が1割強であった。また、自宅からの所要時間は「1時間以内」が半数、「1時間半以内」も3割前後を占めた。年末の忙しい中、遠方より受講いただいたことに改めて感謝したい。

講座に対する評価としては、アンケートから、「内容について興味関心が深まった」(87.2%、97.1%、100%)、「また受講したい」(94.9%、97.1%、100%)との回答がいずれの回でも非常に多いことが示された。当日は講座終了後も毎回担当講師との意見交換や質疑応答が積極的に行われていた。「テーマのつながりが強く、異なる視点の補完が得られ、実生活にとっても役立ちそうであった」「年齢的に身近な話題で良かった。リアルな情報でためになった」「これまでと比べてとても実際の自分自身の役に立つ内容だった」等の感想も寄せられており、これらのことから本講座の目的は十分に達成できたと考えている。

一方、「プロジェクターの投影場所が左半分に限られていたので、右側に着座した受講生に見え

にくかった」、「10分間の休憩は長すぎる」、「講義時間や質疑応答時間をより長く設定してほしい」、「ソーシャルディスタンスを確保し、安心して着座するためには教室が狭かった」との意見も寄せられたため、これらについては再考の余地があるかもしれない。

〈第1回 12月11日〉

事例にみる要介護者の自立支援と

支援のあり方

株式会社真昇 介護事業部 次長

打田 由裕

本講座では、さいたま市桜区五関にある「笑美の郷」という通所介護施設にて、実際に行っている利用者（施設を通所している要介護者・要支援者）への「自立支援」型の介護サービスについて説明した。講座参加者は自立支援の通所介護施設が所見であると思われたので、講師の勤務経験から、いわゆる“古い体質”の通所介護施設の実態と対比しながら説明した。

自立支援型の通所介護サービスの内容では、利用者の自己決定を促し、自然とリハビリに繋がる当社の介護システムを解説し、利用者がどのような原動力で、他の事業所では行わないような行動を促すことができるのかを説明した。本システムが実際に機能する条件として、介護する側の自立の意識が必要であること、利用者が行おうとしていることの邪魔をしない“支えすぎない”介護が必要であることの重要性を説いた。また、自立支援のシステムであったとしても、認知症状のある利用者が伸び伸びと過ごしている様子を写真などで紹介した。

講座参加者を対象に行ったアンケート結果では、本講座を通して、内容について興味や関心が深

まったと87%の方が回答。自由回答欄では、「利用者の自主性を重んじていることに全く同感です」「支えすぎないことの重要性を理解した」という意見がみられた。加えて、介護する側・される側の悩みや需要についての関心、文化的テーマと実際のテーマ（本講座のような事例紹介）の講座を順次開催して欲しいという意見もあった。質問の時間が十分とれず、講座終了後に個別質問を受けたが、その際の質問・回答内容が参加者に発信できなかったことから、十分な質問時間設定の重要性を感じた。個別質問では、車椅子や重介護度の利用者への自立支援の適用の要望や入所施設への適用要望がみられた。

最後に、公開講座という貴重な経験をさせて頂き、跡見学園女子大学関係者の皆様には大変感謝致します。ありがとうございました。

〈第2回 12月18日〉

家族の変化と介護事情

本学兼任教員

林 葉子

高齢者介護が、社会・家族の変化に伴い、大きく変化しているところに焦点を当てて、本講座でその現状と問題点を家族の視点から提示した。

近代以前の我が国では、介護が必要な高齢者は少なく、“家族”が看るという状況にあるのは、身分が高い、権力者、富裕層であったと推測される。

では、いつから高齢者の介護、家族での介護が大衆化（多くの家族が高齢者の介護を経験するようになったこと）されてきたのだろうか。高齢者のみを対象とする制度が制定されたのは、1963年の老人福祉法で、高齢者の健康を中心とした制度は、1982年に制定された老人保健法である。このころまでに、高齢者は長寿化し、人口も増加していった。我が国は、諸外国に比して、高齢化率の伸びは短期に高くなり、世界に先駆けて1970年に高齢化社会（高齢化率7%）、1994年に高齢社会（14%）となった。世界一の長寿の国と邁進しており、介護が必要となる後期高齢者人口も増加

し続けている。国民の多くがいつか介護を受ける機会があり、同時に誰かを介護をする機会が生じてきたといえる。

高齢者の介護が、家族という私的領域から社会化（2000年 公的介護保険制度導入）された大きな要因を、“家族”という視点から見ていく。一つは近代家族から現代家族への移行であろう、家族の介護役割の担い手が不足したことである。近代家族においては、家族は片働きであり、家族には、専業主婦という介護を主に担っていた家族員が存在した。現代になるにつれて、共働き家族が増加し、家族の介護力は脆弱になった。さらに、世帯構成も変化し、高齢世帯では、夫婦のみ世帯や単身世帯が増加した。介護役割をする者が高齢で（老老介護、認認介護）あり、介護する家族もいない高齢者も増加する傾向にあった。従来のように、介護を家族だけに任せておくこと（日本型福祉）が不可能になりつつあった。そこで、社会全体で支援するために公的介護保険制度による介護サービスが必要となった。

しかし、近年、少子高齢化に拍車がかかり労働人口の減少により、介護保険の介護サービスを担う働く世代の人口が減少しサービスの担い手が不足することが予想されていた。さらに人口の多い団塊の世代が高齢期に入り、サービスが不足し、すでに介護役割が家族の手に戻ってきていて、介護離職をする40歳代、50歳代の男女労働者も増加している。また、コロナ禍によって介護サービス不足が顕著になり、介護難民といわれる要介護高齢者とその家族も増加しつつある、誰も介護役割を担えない介護崩壊も懸念されている。

この現状を踏まえて、国としても家族介護をしている労働者のための制度（介護休業制度）を創設し、介護事業のIT化や介護機器（ロボット）の利用を促進し、家族を支援する地域包括ケアシステムを構築するなど、サステナブルな介護事業構想を講じているが、残念ながら、いまだ途上であり、今後の発展が期待されている。

〈第3回 12月25日〉

自立支援のこれまでとこれから

～ホスピタリティ導入の必要性～

本学マネジメント学部

生活環境マネジメント学科准教授

赤松 瑞枝

まず、自立支援の定義が日本と国際基準では異なること、国際的高齢者福祉政策では「高齢者福祉三原則」が基盤となっており、そこには自己決定、生活の継続性、自己能力の活用が謳われているが、我が国では自己能力の活用にのみ焦点があたる傾向があることを紹介した。さらに介護保険において最も利用率が高い通所介護事業所では、サービス選択肢の幅が狭く、事業所環境やサービスの質に対する不満が少なくないことが明らかにされていることを説明した。

ではどうするかを比較検討するために、国際基準のベースにあるノーマリゼーションの考え方やそれらが提唱されるようになった背景について解説した。そしてノーマルとは差別区別をするための概念ではなく、身体的、精神的及び知的な不便や障害がある人達が、そうでない人達と可能な限り同じ条件で生活できるよう現状を改善することと定義されていると述べた。

ノーマリゼーションの実現にあたっては、近年、我が国の研究会でホスピタリティ導入の効果が討議されており、これにより国際基準に近づいていくことが推定されていること、介護におけるホスピタリティとは、利用者への共感力や気働き、柔軟性などであると定義されており、いわゆる「おもてなし」ではないことを紹介した。そして第1回の講義で紹介があった「笑美の郷」で実施した調査及び分析内容を紹介。利用者がその日に参加するレクリエーションを自ら選択する方法を導入したことにより、同事業所では高齢者三原則を全て満たしたサービス抵抗が可能となり、利用者の尊厳が保持されること、職員の取り組み姿勢からホスピタリティが確認できたことを示した。このことから、介護が必要となる高齢者一人ひとりが

尊厳を持ってその方らしく生活するためには、サービスを多様化させ、状況にあった主体的な選択が出来るような環境を整えることが1つの解決方法になると言えることを説明した。

受講生からのレポート

教養講座「これからの高齢者介護と住環境」

秋期教養コース（文京）受講生

仲野 京子さん

第1回「事例にみる要介護者の自立支援と施設のあり方」を受講して

この研修で福祉の平等性という言葉を知りました。各人の幸福感がそれぞれにあるのにどう応えるのか？その視点からディサービスをとらえると何でもやります、お支えしますというスタンスが根の部分にあったのかと気づかされました。講師のご経験から施設側の立ち位置も知ることができ、利用者、家族の在り方もこのお支えします対応を助長させた要因とも感じました。介護保険制度が立ち上がって介護を社会で支えていく発想が生まれたことはとても良いことと思います。

しかしながらお金の問題、施設入所の限界、家族構成の変化など次々と課題が出てきました。この社会の在り方の課題と一人一人が人生を終える在り方が公と個でそれぞれに問われてきたのだと思います。そう考えると国からの自助・共助・公助と突き付けられた福祉の在り方の感覚は介護保険制度も逆戻りかと思われましたが、自分らしく住み慣れた地域でのささやきは個としての望みと図らずも合致したように感じております。この公の制度と個人の思いとの間で自立支援というキーワードが揺らいでいる様に受け止めております。笑美の郷の取り組みは講師が最初に示された通り、介護全体の通過点の一つであり自立支援を上手に仕掛けられた例だと思います。

この様な取り組みが社会に広がって欲しいと願うと同時に既存の施設（例えばディサービス）が全く悪いとも思いません。施設運営者・職員への研修の充実や介護報酬を高めるなどして、老いゆく過程に合う自立支援を取り入れた寄り添いながら支えて頂くサービスも必要と思います。その上で人が人を管理してはいけない、まずは職員が自立すると講師のお言葉が心に響きました。近年、多種多様

な施設やサービスが生まれております。その運営において自立支援を促すことはまだまだ多くの課題があると思います。

自身の「死」に向い今回のような一人一人の学び、学び合いは本当に大切で必要なことと実感いたしました。私も寄り添いの出来る一人でありたいと思います。

第2回「家族の変化と介護事情」を受講して

今回家族の変化と介護事情をテーマにご講演をいただきましてありがとうございます。2025年問題、2040年問題に、まさに介護を必要とすることになる夫と私の置かれている状況を学ぶことができました。

介護人材不足はこの先も改善の努力、「どのようにして」を試みていく必要性が早急に求められる課題です。また、家族介護への支援もまだまだ足りず、行政・企業・社会での取り組みを願うところですが、やはり介護とお金の問題があることによって、なかなか前向きになれない状況が存在すると私は考えています。

家族の変化を考えると「人生の仕舞い方を自分はどうしたいか」を一人一人が覚悟すべきと思うようになりました。同年代の友達からは、何とかお金を貯え、子どもたちに迷惑をかけないよう施設に入りたいという声を聞くようになりました。しかしながら、今後はお金があっても施設入所が難しい状況が見え「今後は施設が老人を選ぶようになっていく」と先生からご指摘をいただきましたが、既に現在もそうした状況を少しずつ感じています。

私自身、介護サービス相談員の活動をしています。施設に入所している利用者様には、介護度が高くなり、日常的に行われているレクリエーションも減っていき、外出などはほとんどなく、流れているテレビの画面にも無関心、周囲の方との会話も成立せず、車椅子に座って日長一日を過ごす方もいらっしゃいます。何より家族の訪問の姿は、私の活動が平日の昼間ということもあるかもしれませんが、

めったに見ることがないという状況です。これが終
の棲家なのかと思うと、簡単に「老後は施設に入所
する」とは言えないと感じます。おそらくこの状況
を理解できている高齢者は少ないことでしょう。

世間では、前期高齢者がボランティアとして施設
で働き、その分の報酬をポイント化して、自身の入
所につなげるようなシステムを作るという考えもあ
るようですが、介護とはボランティアの力で対応で
きるものではなく、また、自分自身のポイントのた
めに行う介護ボランティアは悲しいと思います。子
育ても介護も心の内からの想いでなされる人間とし
ての本質的な営みであってほしいと私は願っており
ます。

家族の変化、社会の変化で求められる介護の多く
が望めない状況となっていくならば、誰を恨むでも
なくその時得られる介護に感謝して、延命も望まず
自分の布団で命を全うしたいと想いを馳せています。
その「死」のために今自分ができる夫との関わり、
子どもたちとの関わり、友人・地域との関わりを大
切に日々生きていきたいと考えています。その関わり
に「ポイント」は存在しません。結果として孤独
死や事故死となったとしても、それがありのままの
姿であるならば良いと覚悟をしたいと考えています。
そしてその事実を、残された方々がそれぞれに正面
から受け止めてほしいと願っています。

私は人が最後にできることは死んでみせること、
と考えています。人の死の在り方は、その人のそれ
までの過ごし方にあるのではないのでしょうか。その
学びとして現代の家族事情、介護事情を多くの方に
知っていただき自覚していただくこと、それぞれが
考えることが大切と感じました。

介護を良くするためには子どもたちがよりよく育
つ社会の在り方にすること、親子の関係、社会の環
境を整えてこそ、その延長線上に「よりよい介護」
につながる心の在り方、社会の在り方が見えてくる
と思えてなりません。そして社会で介護職員の増加
を目指すのであれば、職員の地位を医師や看護師と
同等に位置づけ、専門職としての信頼と感謝、そし
て待遇(報酬)を高めることが大切と考えています。

先生にご講演いただき、現実をしっかりとするこ

と、自分の人生を誰かに投げ出さず最後まで生きき
る覚悟を持って、今を生きていくことを再確認しま
した。このご縁をいただき、学ぶことの尊さとともに、
林先生の今後のご活躍に、一人の女性としてエール
をお送り申し上げます。

結びに、私の母は昭和の初めに生まれた女性でし
たが、老い衰える過程で「お世話になります、後を
よろしく」との言葉とともに親子でありながら手をつ
いて頭を下げた姿が今も忘れられません。家族や
社会の在り方が今とは全く違い、家族の介護をはじ
め、人に尽くすことが当たり前のようであった母の
生きた時代に介護保険制度があったらどうだったの
だろうとの想いに至りました。

第3回「自立支援のこれまでとこれから～ホスピ タリティ導入の必要性～」を受講して

この講座のまとめといえるお話の中で、印象に
残ったのは「高齢者福祉の三原則」とノーマリゼー
ション、ホスピタリティという言葉です。自立支援
の在り方を提示され、調査研究の結果や今後の課題
を分かりやすくご講演いただき、感謝申し上げます。
その上で、先生の今後の課題として示されたように、
介護の終わりは死であること、その死に至るまでの
過程に沿った自立支援の在り方、また新設され増加
しているサ高住やサービス付老人ホームといった多
様な施設で自立支援をどう取り組んでいくか、施設
を選ばない・選ばない在宅介護での自立支援とは、
とまだまだ調査研究が求められると感じました。

誰かに委ねることなく、ひとりで死を全うできたら、
と願う気持ちが湧いてきてしまいます。医療も
進歩し、簡単に死なせてもらえない時代は、果たし
て幸せといえるのでしょうか。そう思うと自分の人
生の選択権は自分で持っていたいと感じます。人生
のゴールは「死」である以上、自立支援もどこかで
限界を迎えるのかもしれないとも思うところで、自
立支援の先には自己尊重支援になるのではないかと
思いました。死に時は誰も選べないからこそ、高齢
者の仲間入りをしたら、あるいはその前に、自身の
人生の終わり方を見越しておく必要があると私は考

えています。

2025年問題、2040年問題を踏まえて、自立支援からその後の死まで、私たちは現代の高齢者として現実を直視した学びをすることで、幸せな人生の仕舞い方につなげていくことができると思います。今回、その一助となる学びを得られたことに心より感謝を申し上げますとともに、先生の今後のご活躍にご期待申し上げます。

■ 資料

令和3年度 春期

跡見学園女子大学の 公開講座のご案内

新座キャンパス

令和3年
6/12
6/26

毎週土曜日
(全3回)

「マンガの神様」から戦後日本の大衆文化の足跡を学ぶ 教養コース 手塚治虫とマンガ・アニメ文化

後援/埼玉県教育委員会・新座市教育委員会

文京キャンパス

令和3年
7/3
7/17

毎週土曜日
(全3回)

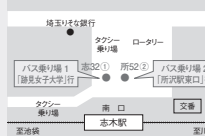
言語学者が考える、現代日本社会における日本語と英語のあり方 教養コース 身近なことばの常識を覆す

後援：文京区・公益財団法人文京アカデミー



新座キャンパスへのご案内

- 東武東上線(地下鉄有楽町線・副都心線)
「志木駅」下車 南口より西武バス約15分
「跡見女子大」下車



●JR武蔵野線

- 「新座駅」下車 北口より西武バス約7分
「跡見女子大」下車



●西武池袋線・西武新宿線

- 「所沢駅」下車 東口より西武バス約25分
「跡見女子大」下車

※新座・文京キャンパスともに自家用車のご案内はご遠慮ください。

文京キャンパスへのご案内

- 東京メトロ丸ノ内線 「茗荷谷駅」より徒歩2分
- 東京メトロ有楽町線 「護国寺駅」より徒歩8分



新座キャンパス 文京キャンパスまでの 路線図



<申込・照会先>
跡見学園女子大学
ATOMI UNIVERSITY

新座キャンパス
教務部教務課 公開講座係
〒352-8501 埼玉県新座市中野1-9-6
TEL. 048-478-3340
FAX. 048-478-4133
E-mail: d-kyomu@mmc.atomi.ac.jp
https://www.atomi.ac.jp/univ/

文京キャンパス
文京キャンパス事務局 公開講座係
〒112-8687 東京都文京区大塚1-5-2
TEL. 03-3941-7420
FAX. 03-3941-8333
E-mail: d-kyomu@mmc.atomi.ac.jp
https://www.atomi.ac.jp/univ/

跡見の二つのキャンパスで「新しい学び」を愉しむ

新座キャンパス

教養コース 手塚治虫とマンガ・アニメ文化

令和3年6月12日～6月26日 毎週土曜日(全3回)
時間 10:00～11:30 場所 新座キャンパス 対象 15歳以上(中学生を除く)の男女
定員 50名(応募者多数の場合は抽選) 受講料 無料
講座責任講師 本学文学部現代文化表現学科専任講師 三輪健太郎

6/12(土)

手塚治虫と戦後日本

講師：本学文学部現代文化表現学科専任講師 三輪健太郎

幼少期以来ディズニーなどのアメリカ文化から影響を受けつつ、そのアメリカが敵国となった戦時下で思春期を過ごした手塚治虫は、まさに戦後日本文化の申し子としてマンガ表現の可能性を広げていった作家です。彼の生涯とその作品におけるいくつかの転機に着目しながら、大衆文化を通して日本の現代史について考えます。

6/19(土)

少女マンガと手塚治虫

講師：相模女子大学学芸学部メディア情報学科教授 岩下朋世

手塚治虫の少女マンガとしては「リボンの騎士」がよく知られている。しかし、その他にも手塚は1950年代に多くの作品を少女雑誌に発表している。「リボンの騎士」が特長的に重要な作品として扱われる背景を明らかにし、少女マンガというジャンルを取り巻くイメージについて考えます。

6/26(土)

アニメ史における手塚治虫

講師：本学文学部現代文化表現学科准教授 渡邊大輔

「漫画の神様」と呼ばれた手塚治虫は、一方で、現代にいたる日本独特の「アニメ」文化の成立にも多大な足跡を残しました。「アニメを作るためにマンガを描いている」とまで語り、情熱を燃やした手塚のアニメ作品とは、アニメーション史にとってどのような意味を持つのでしょうか。代表作を鑑賞しながら、手塚アニメの魅力と意義について解説します。

申込方法 往復はがき・FAX・Webのいずれかに下記の事項をご記入の上お申し込みください。
受付期間 ①「手塚治虫とマンガ・アニメ文化」受講希望 ②氏名(フリガナ) ③郵便番号・住所 ④電話番号 ⑤性別 ⑥年齢 ⑦職業 ⑧本講座をお知りになったきっかけ ⑨次回以降の本学公開講座のご案内のご希望の有無

申込先 跡見学園女子大学 新座キャンパス 教務部教務課 公開講座係
〒352-8501 埼玉県新座市中野1-9-6
TEL. 048-478-3340 FAX. 048-478-4133
E-mail: d-kyomu@mmc.atomi.ac.jp https://www.atomi.ac.jp/univ/

●受講特典：全3回全て出席の受講生に、公開講座修了証を頒布します。また、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、従来のように、公開講座修了証の頒布はできません。
●感染症対策：受講時に検温やマスク着用のご協力をお願いいたします。マスク未着用や、発熱、体調不良時には公開講座の受講をご遠慮いただく場合があります。

文京キャンパス

教養コース 身近なことばの常識を覆す

令和3年7月3日～7月17日 毎週土曜日(全3回)
時間 10:00～11:30 場所 文京キャンパス 対象 15歳以上(中学生を除く)の男女
定員 50名(応募者多数の場合は抽選) 受講料 無料
講座責任講師 本学文学部コミュニケーション文化学科准教授 中村 聡

7/3(土)

ことばの地域差の今

講師：本学文学部コミュニケーション文化学科准教授 中西太郎

「今や方言なんて使っていない」、そんなふうに考える人が首都圏には多いのではないのでしょうか。そう考える人は狭い方言の見方に捉われているかもしれません。現在でも身近にあることばの地域差を解説することで、現代のコミュニケーションにおける方言の役割について考えてみたいと思います。

7/10(土)

英語学習の「俗説」を検証する

講師：本学文学部コミュニケーション文化学科専任講師 穂刈友洋

現在、多くの日本人が年齢を問わず英語を学んでいます。多くの人が学ぶ機会があるからこそ、英語学習は個人の経験や思い込みにとどく「俗説」が形成されやすい分野です。たとえば、「英語学習は子どものうちから始めないとけない」とよく言われますが、これは本当でしょうか。本講演では、こういった英語学習に関する「俗説」の妥当性について考えていきます。

7/17(土)

カタカナ英語改革論

講師：本学文学部コミュニケーション文化学科准教授 中村 聡

日本社会では数多くの英単語が、カタカナで書かれ、日常生活で頻繁に使われています。しかしその多くは実際の英語音と大きく異なるため、日本に慣れていない英語話者には理解されず、日本人の多くはそれらの語を、英語として正しく発音することができません。この状況を改善するには、カタカナ英語を原音に近づけるための改革が必要です。

申込方法 往復はがき・FAX・Webのいずれかに下記の事項をご記入の上お申し込みください。
受付期間 ①「身近なことばの常識を覆す」受講希望 ②氏名(フリガナ) ③郵便番号・住所 ④電話番号 ⑤性別 ⑥年齢 ⑦職業 ⑧本講座をお知りになったきっかけ ⑨次回以降の本学公開講座のご案内のご希望の有無

申込先 跡見学園女子大学 文京キャンパス事務局 公開講座係
〒112-8687 東京都文京区大塚1-5-2
TEL. 03-3941-7420 FAX. 03-3941-8333
E-mail: d-kyomu@mmc.atomi.ac.jp https://www.atomi.ac.jp/univ/

●受講特典：受講期間終了後、裏書にて受講証を頒布いたします(応募者多数の場合は抽選となります)。
※お申し込みいただいた方々の個人情報は、跡見学園女子大学教務部教務課公開講座係にて、講座案内の他、運営に必要な範囲で適切に管理し、使用いたします。個人情報については同意なしに第三者に開示・提供することはありません(法令などにより開示を求められた場合を除く)。
※悪天候等、不測の事態が生じた場合には、本学HPに中止や時間繰り下げ等の情報を掲載します。

令和3年度 秋期

跡見学園女子大学 公開講座のご案内

新座キャンパス

令和3年
11/20
12/4

教養コース 都市のコミュニティを考える

後援/埼玉県教育委員会・新座市教育委員会

毎週土曜日
(全3回)

文京キャンパス

令和3年
12/11
12/25

教養コース これからの高齢者介護と住環境

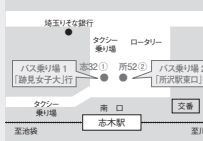
後援/文京区・公益財団法人文京アカデミー

毎週土曜日
(全3回)



新座キャンパスへのご案内

- 東武東上線(地下鉄有楽町線・副都心線) [志木駅]下車 南口より西武バス約15分 [跡見女子大]下車



JR武蔵野線

- [新座駅]下車 北口より大学バス約7分 北口より西武バス約7分 [跡見女子大]下車



西武池袋線・西武新宿線

- [所沢駅]下車 東口より西武バス約25分 [跡見女子大]下車

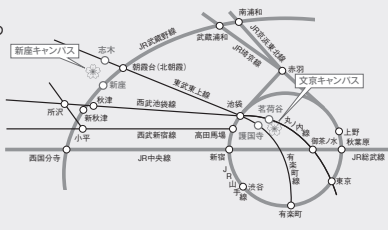
*新座・文京キャンパスともに自家用車のご案内は別途ご用意ください。

文京キャンパスへのご案内

- 東京メトロ丸の内線 [茗荷谷駅]より徒歩2分
- 東京メトロ有楽町線 [護国寺駅]より徒歩8分



新座キャンパス 文京キャンパスまでの路線図



<申込・照会先>

跡見学園女子大学 ATOMI UNIVERSITY

新座キャンパス
教務部教務課 公開講座係
〒352-8501 埼玉県新座市中野1-9-6
TEL 048-478-3340
FAX 048-478-4133
E-mail: d-kyomu@mnc.atomi.ac.jp
https://www.atomi.ac.jp/univ/

文京キャンパス
文京キャンパス事務局 公開講座係
〒112-8687 東京都文京区大塚1-5-2
TEL 03-3941-7420
FAX 03-3941-8333
E-mail: d-kyomu@mnc.atomi.ac.jp
https://www.atomi.ac.jp/univ/

「跡見」の二つのキャンパスで“新しい学び”を愉しむ

新座キャンパス

教養コース 都市のコミュニティを考える

令和3年11月20日～12月4日 毎週土曜日(全3回)

時間 10:00～11:30 場所 新座キャンパス 対象 15歳以上(中学生を除く)の男女
定員 50名(応募者多数の場合は抽選) 受講料 無料
講座責任講師 本学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科准教授 土居洋平

11/20

(居場所づくり)から都市コミュニティについて考える

講師:本学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科准教授 土居洋平
現在、都市において多様な人々の「居場所」となるような施設(コミュニティカフェ・地域のたまり場・コミュニティベース等)が次々に誕生しています。本講座では、こうした「居場所」づくりの活動を事例に、現代社会において再び(つながり)が求められていることや、その意義と効果について考えたいと思います。

11/27

徒歩と自転車だけで暮らせる都市コミュニティ

講師:本学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科准教授 坪原紳二
自転車や公共交通機関に頼ることなく、徒歩と自転車だけで日常生活を完結できるコミュニティは、体によく、環境にやさしく、商店街がにぎわい、さらに感染症に強く、またさまざまな出会いを育んでくれるコミュニティです。本講座ではそんなコミュニティの中心市街地や道路のつくり方を、海外の事例に学びながら考えます。

12/4

韓国における都市コミュニティと市民活動

講師:本学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科准教授 松井理恵
韓国では、血縁組織、地縁組織(郷友会など)、学縁組織(同窓会など)が重要であるとい一般的に言われていますが、この講座ではあまり注目されてこなかった韓国のコミュニティに焦点を当てます。都市コミュニティを中心として展開された市民運動の紹介を通じて、韓国の都市に生きる人びとのリアリティをお伝えします。

往復はがき・FAX・Webのいずれかに下記の事項をご記入の上お申し込みください。
①「都市のコミュニティを考える」受講希望 ②氏名(フリガナ) ③郵便番号・住所 ④電話番号 ⑤性別 ⑥年齢
⑦職業 ⑧本講座をお知りになったきっかけ ⑨次回以降の本学公開講座のご案内のご希望の有無
受付期間:10月20日(水)～11月3日(水) 必着 ※受付期間外のお申込はお控えください。
受付方法:往復はがき・FAX・Webのいずれか ※E-mailでのお申込はお控えください。

跡見学園女子大学 新座キャンパス 教務部教務課 公開講座係
〒352-8501 埼玉県新座市中野1-9-6
TEL 048-478-3340 FAX 048-478-4133
E-mail: d-kyomu@mnc.atomi.ac.jp https://www.atomi.ac.jp/univ/

●受講特典:全3回全て出席の受講生に、公開講座修了証を発行いたします。また、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、従来特典としていた本学図書館の利用はできません。
●感染症対策:受講時に検温やマスク着用のご協力をお願いいたします。マスク未着用や、発熱、体調不良時には公開講座の受講をご遠慮いただく場合があります。

文京キャンパス

教養コース これからの高齢者介護と住環境

令和3年12月11日～12月25日 毎週土曜日(全3回)

時間 10:00～11:30 場所 文京キャンパス 対象 15歳以上(中学生を除く)の男女
定員 50名(応募者多数の場合は抽選) 受講料 無料
講座責任講師 本学マネジメント学部生活環境マネジメント学科准教授 赤松耀枝

12/11

事例にみる要介護者の自立支援と施設のあり方

講師:株式会社真昇 介護事業部長 打田由裕
今や、デイサービスはホテルサービスになっているのではないかと疑問に思うことがあります。多くの利用者を獲得するために「なんでもやります」という施設は、果たしてご利用者のための施設といえるのでしょうか。職員側の視点での「平等」「転ばぬ先の杖」から、「自主自立」視点のデイサービスについて考えます。

12/18

家族の変化と介護事情

講師:本学兼任教授 林葉子
2000年に施行された介護保険制度が創設される大きな契機となったのは、介護を担ってきた家族介護者の様相の変化であるといわれています。介護保険制度が施行されて20年が経ちました。家族の様相もさらに変化しているうちに、コロナ禍で高齢者介護に新たな問題も発生しています。これらのことをふまえてあらたな高齢者介護の在り方を考えていきたいと思います。

12/25

自立支援のこれまでとこれから～ホスピタリティ導入の必要性～

講師:本学マネジメント学部生活環境マネジメント学科准教授 赤松耀枝
わが国の介護保険制度における自立支援は、国際的高齢者福祉政策の基礎となる「自立」の定義を十分に満たしていないことから導線を備わった介護現場を創り出しています。本講座ではそうした自立支援における問題を整理するとともに、それを解決する一手法として注目されている、ホスピタリティの導入とその効果について解説します。

往復はがき・FAX・Webのいずれかに下記の事項をご記入の上お申し込みください。
①「これからの高齢者介護と住環境」受講希望 ②氏名(フリガナ) ③郵便番号・住所 ④電話番号 ⑤性別
⑥年齢 ⑦職業 ⑧本講座をお知りになったきっかけ ⑨次回以降の本学公開講座のご案内のご希望の有無
受付期間:10月20日(水)～11月17日(水) 必着 ※受付期間外のお申込はお控えください。
受付方法:往復はがき・FAX・Webのいずれか ※E-mailでのお申込はお控えください。

跡見学園女子大学 文京キャンパス事務局 公開講座係
〒112-8687 東京都文京区大塚1-5-2
TEL 03-3941-7420 FAX 03-3941-8333
E-mail: d-kyomu@mnc.atomi.ac.jp https://www.atomi.ac.jp/univ/

●受講特典:全3回全て出席の受講生に、公開講座修了証を発行いたします。(応募者多数の場合は抽選となります)。
※お申し込みいただいた方々の個人情報は、跡見学園女子大学教務部教務課公開講座係にて、講座案内の他、運営に必要な範囲で適切に管理し、使用いたします。個人情報については同意なしに第三者に開示・提供することはありません(法令などにより開示を求められた場合を除く)。
※悪天候等、不測の事態が生じた場合には、本学HPに中止や時間繰り下げ等の情報を掲載します。

公開講座ダイジェスト 2021
跡見学園女子大学公開講座の記録

令和4年3月発行

発行 跡見学園女子大学

〒112-8687 東京都文京区大塚1-5-2

電話 03(3941)7420

FAX 03(3941)8333

E-mail d-kyomu@mmc.atomi.ac.jp

URL <http://www.atomi.ac.jp/univ/>
